

## 誤訳の解剖 (3)

国 広 哲 弥

はじめに

「誤訳の解剖」と題する一連の拙論は, Arthur Hailey, *Airport* (Pan Books, 1968) の邦訳, アーサー・ヘイリー 武田公子・大坪光之訳『大空港』上下 2 巻 (ハヤカワ文庫, 早川書房, 1973) に見える誤訳を取り上げ, それに言語学的な分析と解説をほどこしたものである。そこに関連する言語学的な分野としては, 英文法, 日英語の意味論と語用論, 日英語対照表現論などがある。誤訳の内容からして初歩的なレベルに留まる場合もあるが, 理論的な発展に繋がる場合もある。今回得られた新しい発展としては, 次のものがある。

【51】 認知焦点のずれ (the shift of focus)。

【53】 時空間推義 (space-time metonymy)。

【54】 表現対象場面の構造と表現視点。

このような問題について, 本論文では軽く触れるに留め, 詳論は別の機会に譲ることとする。

翻訳『大空港』には, こまかな誤訳, 訳し落としまで含めると, おびただしい数の問題点がある。ここでは, そのうち言語学的に興味深いものだけを選んで論じることとする。

本論文の既発表の 2 編は次の通りである。

「誤訳の解剖 (1)」, 『神奈川大学言語研究』第 17 号, 神奈川大学言語研究センター, 1995 年 3 月。

「誤訳の解剖 (2)」, 『人文研究』第 124 号, 神奈川大学人文研究所,  
1995 年 10 月。

各編に収めた誤訳例には通し番号を付けており, 次のようになっている。

第 1 編: 【1】～【21】。

第 2 編: 【22】～【48】。

原文および翻訳文の末尾に ( ) に入れて示した数字は, それぞれのページを表す。

筆者は, 日本語の誤用について『日本語誤用・慣用小辞典』(講談社現代新書, 正編 1991 年 3 月; 続編 1995 年 5 月)を出しているが, この「誤訳の解剖」はその翻訳編に当たるものである。その分析と解説の方法はほぼ同じものとなっている。

誤訳例の配列順はストーリーの流れに沿っており, 必要に応じて用例の理解の助けになるように説明を加える。使用した辞書類の略号解は論文の末尾に示してある。

#### 【49】 ‘INFLEXIBLE’ は「毅然たる」か。

But in case of delay, friendship didn't count. At such moments there was an inflexible rule: the mail went by the fastest route. (210)

しかし, 遅延した場合は, この友情なるものも全く無効となった。こうした時には, 毅然たる規則があり, 郵便物はいちばん早い路線の便に載せられることになっていた。(311-2)

(改訳) (該当部分のみ) 変更不可能な / 厳然たる。

郵便物を飛行機で送ると, 航空会社としては収益になるので, 郵便局に友人のいる航空会社員は郵便物をできるだけ自分の会社に回してもらうように工作するのであるが, 飛行機の出発が遅れる場合にはそうはいかないという話である。ここで問題になるのは, 「毅然」という日本語の用法である。この語は以下に示す国語辞典の説明に明らかのように, 人間の意志・態度につい

て用いられる語であり、「規則」に用いることはできない。

「毅然」

[大辞林] 意志が強く，物事に動じないさま。意志・信念を断固貫くさま。

「一たる態度」

[三国] 態度が決まっていて，ゆるがないようす。「一たる態度」

一方，‘inflexible’の方は人間にも規則にも用いることができる。『研大』を見ると次のようになっている：

1 確固とした，毅然(きぜん)たる，揺るがない，剛直な：～ determination 断固とした決意 / an ~ will 不動の意志 / ~ to threats 脅しに屈しない。

3 変えられない： The rule is ~. その規則は変更を許さない。

これを見ると確かに「毅然たる」という訳語は見えるが，用例にうかがわれるように，これは人間の意志に関して用いられている。3に‘rule’の用例があり，そこには「変更を許さない」とある。当然こちらを採用すべきであるということになる。

【50】 ‘HALL’ は〈廊下〉。

There was a similar board for stewardesses in their crew room down the hall. (213)

スチュワーデスについては，ホールの向こうにある彼女らの乗務員室に，同様の掲示板が掲げられていた。(316)

(改訳) スチュワデスについての同様な [乗務予定] 掲示板は廊下を少し行ったところの彼女らの乗務員控え室に設けられていた。

外来語として「ホール」といえば〈広い部屋〉を指すのが普通であり，「ホールの向こう」と言えば，その広間を越えたさらに先を指すことになる。‘down the hall’ という原文からはそういう〈越えた〉という意味は出てこない。この‘hall’はアメリカ英語の用法で〈廊下〉という意味であり，‘down’は‘A

patrol car came down the street. パトカーが一台通りをやってきた' [英和活用2] という場合と同じで, <along> という意味である。同様な誤訳が何度か繰り返されている。

- (1) A similar dispatch room for domestic flights was down the hall.  
(215)

国内便についても同様に, ホールの向う側に出発司令室があった。(318)

- (2) Although there was a bathroom of sorts down the hall, which three apartments shared, ... (223)

風呂らしきものは下のホールにはあるが, 三つのアパートが共同で使用しているもので, ... (330)

(2) の例は安アパートの構造について述べているもので, そういう所に大広間があるとは考えにくい。「下のホール」という読みも英語からは出てこない。これも「廊下を行ったところに」と解さなければならない。

【5 1】 'NEED' をめぐる日英語表現の違い—— 認知焦点のずれ。

He was lean and angular, with a hollow-cheeked, mournful face, and always looked as if he needed a good meal. (213)

彼は痩せて骨ばっていて, 頬はくぼみ, 悲しげな顔をしており, いつも, もっといい食事が必要であるかのように見えた。(317)

(改訳) 彼は痩せてごつごつした体付きで頬は落ち, 陰気な顔をしていて, いつもひどくお腹をすかせているように見えた。

これは誤訳ではないが, 'need' をめぐって日英語で表現法が大きく異なっているので, ここで取り上げることにした。目の前にある状態がある場合, その状態をそのまま直接に描写するか, あるいはその状態から論理的に引き出される帰結の方を表現するかで, 日英語のあいだに食い違いが見られる。

現状：空腹である。

帰結：食物をとる必要がある。

この二つのどちらに認知の焦点を合わせるかによって、言語表現が異なってくることになる。あとに示す例に明らかのように、「ひげが伸びている」という現状を言語で表現するのに、日本語ではそれをそのまま表現するが、英語では、「ひげが伸びているのなら、剃る必要がある」という論理の筋道に従って、'He needs a shave' と表現する。これを直訳して、「彼はひげを剃る必要がある」とすると、自然な日本語でなくなる。なお、上例で、'a good meal' が「もっとよい食事」と訳されているが、この 'good' は、状況から考えて、食事の質ではなくて、量を言っていると見るべきである。この栄養不良らしき男は飛行機の乗務員であり、原文ではすぐ続けて、'Stewardesses heaped extra food upon him, but it never seemed to make any difference.' と書かれている。SRD2 の good 24 に 'have a good meal [talk] 十分に食事をとる [話す]' という例が挙げてある。

この 'need' をめぐる表現の違いをうまく捉えた翻訳の例として、次のものがある：

- (1) ...hollow cheeks made him appear gaunt, and he was in *need* of a shave. — Arthur Hailey, *The Final Diagnosis*.

頬のこけた、やつれた顔には、不精ひげがはえていた。—永井 淳訳『最後の診断』（新潮文庫）。

- (2) And grey, uncreased slacks drooped over scuffed shoes that sadly *needed* shining. — *ibid.*

そしてグレーの折り目の消えたズボンが、埃だらけのすりへった靴の上にだらしなく垂れさがっていた。— 同上。

*Airport* のあとの方に次の (3) の例があるが、ここではこの表現の違いがうまく捉えられている。

- (3) The cab driver turned. 'Yeah, waddya want?' He had a mean, flabby face, and *needed* a shave. (229)  
 運転手はふり返って「何か用かね」彼は下品なたるんだ頬をしていて、ひげがのぞいていた。(338)

このような 'need' の使い方は他の作家にも見られる一般的なものである。

- (4) He *needed* a shave. The stubble that showed was gray.— Robert B. Parker, *Early Autumn*. (彼はひげが伸びていた。のぞいたひげは胡麻塩だった。)
- (5) He badly *needed* a shave, and it made him look both older and more furtive.— Ross Macdonald, *The Blue Hammer*. (男のひげは随分伸びていて、そのせいでいっそう老けても見えたし、うさん臭くも見えた。)
- (6) The other flowers looked wilted, and the two benches *needed* painting.— Dean Koontz, *Cold Fire*. (ほかの花はしおれているように見え、2台のベンチはペンキがはげていた。)

【5 2】 機能を指す 'SHELTER'—'the + 抽象名詞 + of' の表現構造。

The bus stopped and the crew scrambled out, diving for the shelter of the nearest door. (214)

バスが止まり、乗員たちは争うようにバスから降りていちばん近いドアの雨除けの方に駆け込んでいった。(318)

(改訳) (該当部分のみ) いちばん近くのドアの風蔭に飛び込んで行った。

飛行機の乗務員を載せたバスが乗客用の出口のところに到着した場面である。翻訳のように「雨除け」というと、雨に濡れないための小屋かひさしのような建造物を指すことになるが、ここはドアの内側の風雪の当たらないと

ころを指している。この 'shelter' は本来は〈状態〉あるいは〈機能〉を指す語であり、COD 8 には '3 a shielded condition; protection' とあり、CIDE には '(a building designed to give) protection from bad weather, danger or attack' とある。両方を合わせると、〈悪天候・危険・攻撃などから護られること [護られた状態]〉ということになり、その派生義として、そういう保護を与えるための空間あるいは建造物を指すことになる。上の原文では、前後関係から〈機能〉→〈機能空間〉の意味で用いられていると考えられる。つまり、〈ドアが風雪をさえぎっているところ〉である。

'the shelter of the door' に対して、「風雪を避けるドア」を当てることが出来ることからうかがわれるように、'the shelter of' は 'door' に掛かる修飾語の役割を果たしている。一般化して言えば、'the + 抽象名詞 + of' は意味の上で連体修飾語の働きをすることがある。類例に次のものがある。

- (1) We reached *the safety of* the opposite bank. — *Reader's Digest*. (私たちは安全な対岸にたどりついた。)
- (2) [急流で女性が流されそうになっている] He held her in a death grip, as he began to grapple his way to *the safety of* the shore. — Sidney Sheldon, *The Sands of Time*. (彼は彼女を死にもの狂いでつかみ、水流と格闘しながら安全な岸を目指して進み始めた。)
- (3) There were not enough seats on my bus for all the people who wanted to escape from snow-bound Truckee and ride down to *the warmth and safety of* Sacramento. — James Kircup, *American Themes and Scenes*. (雪に閉じこめられたトラッキーの町を逃れて、暖かくて安全なサクラメントまで山を降りて行きたいと思っている人達全員に行き渡るだけの座席はバスにはなかった。)
- (4) swim to *the safety of* an island 安全な島まで泳ぐ。[新クラウン 5]

【5 3】 'WEATHER' の空間的用法 — 時空間推義 (SPACE-TIME METONYMY).

The company weather forecaster joined the other four. He was a pale young man, scholarly behind rimless glasses, who looked as if he rarely ventured into the weather personally. (215)

会社の気象予報官が、彼ら四名に加わった。青白い顔をした若い男で、縁無し眼鏡の下に学者的雰囲気を持っており、天候のことについて、直接自分で危険を冒してみたことはほとんどないように見えた。(319)

(改訳) 会社の予報官がほかの四人に新しく加わった。青白い顔をした若い男で、縁なし眼鏡の奥に学者的雰囲気があり、悪天候の中にみずからあえて出て行くようなことは、めったにないように見えた。

このセクションの見出しの中に 'metonymy' に当たる日本語として「推義」を用いているが、これは、筆者の考案によるものである。一般には「提喩」が当てられるけれども、これだと、比喩のたぐいという印象を与えかねない。metonymy は比喩とはまったく異なった意味的性質のものであり、時間的・空間的に隣接する部分に意味が移って行く現象を指しているのである。そういう意味内容をふまえて「推義」と呼ぶ。ある同一現象の空間と時間のあいだを意味が移る場合を特に「時空間推義」と呼ぶことにする。

上の例の 'ventured out into the weather' の部分の翻訳「天候のことについて..危険を冒す」は「天気予報を出すことに関して冒険をする」というふうに読めるが、それは誤訳である。改訳に示したように、「部屋から悪天候のなかに出て行く」(out--into)ことを言っているのである。そういうことをしそうにない“青白きインテリ”に見えるというわけである。

'out into' というような、普通なら見落とししようのない語を敢えて無視したような誤訳が生じた原因の一つとして、'weather' は〈天候〉というかなり抽象的な意味しか表し得ないという思い込みがあったのではないかということが考えられる。さらに、'weather' はこの語だけで〈悪天候〉を意味し得ることも見逃されていたのではなからうか。〈悪天候〉という意味の場合、さらに時空間推義が生じて、〈悪天候の荒れ狂う戸外〉という意味になることにも気付かれていないと思われる。〈悪天候〉に関しては、次の定義を参照



weather 3: disagreeable atmospheric conditions: as a: RAIN,  
STORM b: cold air with dampness. [MWCD]

「天候」は、地球上のある限られた空間の気象状況を指す語であるから、認知焦点がその空間の方に移るのは当然であるが、さらに、本来は時間単位を表す語も、その時間帯の空間状況の方に意味をずらすことがある。これも時空推義の例となる。例えば 'day' は 'week, month, year' などと並んで時間単位を表すが、'a beautiful *day*' と言うときは〈昼間〉という時間帯の〈天候状況〉を指している。'a cloudy *day*, a rainy *day*' なども同様である。'day' が空間義を派生させていることには一般の英々辞典も英和辞典も触れていないようであるが、筆者が執筆を担当した SPD の 'day' の項には次のようである。この記述を受け継いだ SRD2 も同様である。

day 2 (天候から見た) 1日; 空: a beautiful [or a bright, a clear, a fine, a sunny] *day* 晴れた日 / a cloudy [a rainy, a stormy] *day* 曇った [雨降りの, 荒れ模様の] 日。

さらに手元には 'dawn, night, afternoon' の例がある:

- (1) [飛行中のヘリコプターから釣り下げられて外に出る場面] Then he stepped into the frigid *dawn*. — Clive Cussler, *Vixen 03*. (それから彼は凍り付くような夜明けの空中に出て行った)
- (2) The flames ran up the walls and found little holes in the roof, and leaked through into *the night*. — John Steinbeck, *Tortilla Flat*. (炎は壁をはい上がり、屋根の小さい穴を見付けて夜の外に出て行った)
- (3) The apartment was stuffy and I walked through it opening windows so that *the spring night* could circulate. — Robert B. Parker. *Double Deuce*, 223. (アパートの中はむっとしていたので、私は歩きながら窓を次々に開けていき、春の夜の空気が部屋の中をめぐるようにした) [〈空

間〉から〈空間を占める空気〉に意味が派生している]

- (4) We drove on in the autumn *afternoon*, heading north.— John Steinbeck, *Travels with Charley*. (私達は北にむかって秋の午後の戸外を走り続けた)
- (5) He got into his grey Toyota wagon and drove slowly back out onto Fiddler Key, through the late bright *afternoon* of July.— John MacDonald, *Condominium*, 141. (彼はグレーのトヨタ・ワゴンに乗り込み、よく晴れた七月のおそい午後の空気の中をフィドラー・キー島にゆっくりと戻って行った)

日本語の「雨の中に傘も差さずに出て行った」の「雨」も同様に〈雨の降っている戸外の空間〉を意味している。

【54】 'HAVE WORD' の意味：表現構造「人間中心」と「状況描写」。

'We're delayed an hour. The gate agent just had word.' (217)

「一時間遅れるんですって。搭乗口にいる会社のものが言っていましたよ」(321)

(改訳)「出発は一時間遅れです。搭乗口の係のところにさっき知らせがありました」

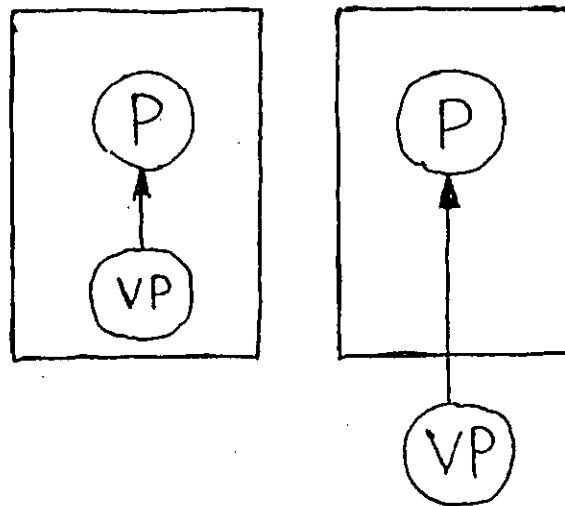
この 'word' の用法については、SRD2 に次のように記述されている：

word 4 [単数形で、しばしば無冠詞]たより、消息、知らせ、報道、ニュース；〔まれ〕うわさ： have [or receive] *word* (手紙や電話で) 知らせを受ける。

ここには、日英語間の表現構造の違いが見られる。英語の方は 'The gate agent' という人間が主語になっているのに対して、改訳では、「知らせ」とい

う出来事名詞が主語になっている。つまり、ある同じ状況を表現するのに、英語では人間を中心に行っているのに対して、日本語の方は人間を離れて、状況そのものを描写していることになる。これは日英語間に広く見られる表現構造の対立である。認知言語学的に言いなおすならば、「表現視点」が、英語では「表現対象場面」の中の人間にあるのに対して、日本語では、表現視点は表現対象場面のそとにあるということである。

下図において、P は「表現対象」を表わし、それを囲む四角形は表現対象の存在する場所を表す。VP は「表現視点」(view point)を表す。表現対象とその存在場所を一緒にして「表現対象場面」と呼ぶことにする。この捉え方には、Langacker (1990: 315 ff.) から示唆を受けた点がある。この表現構造の対立については、国広 (1974) および国広 (1993) を参照されたい。



【55】 'BE PREDICATED ON' の意味。

Didn't the fools know that this was no time for stupid chattering? ...No time, when Guerrero's whole future — at least, his family's future...the success of the plan so painstakingly worked out...everything, *everything*, was predicated on getting to the

airport with time to spare. (221)

一体この馬鹿者どもは、今ペチャクチャ喋っている時ではないということに気がつかないのか。そんな時間などないのだ。ゲレロの全将来——少なくとも彼の家族の将来は、このひどく苦心している仕事が成功すれば...すべてのことが...ともかく空港に到着しないことには。  
(327)

(改訳) この馬鹿者どもは今は下らないお喋りをしている場合じゃないことが分からないのか...そんな場合じゃないんだ。今はゲレロの全将来が——少なくとも家族の将来が...苦心惨憺して煉りあげた計画がうまく行くことが...何もかも、本当に何もかもが、時間の余裕をもって空港に着くことに掛かっているんだ。

空港に急ぐゲレロは、バスに同乗したイタリア人家族が呑気にお喋りしているのが気にいらず、心の中で毒づいているところである。'No time' は直前の 'this was no time for...' の繰り返しと見られるので、「時間がない」ではなくて、「そういう時ではない」の意味だと考えられる。なお原文は言葉が端折られた形になっており、No time' のあとは 'this was time when...' と続くものと考えられる。次に翻訳では 'plan' が「仕事」になっているが、これは 'worked out' を誤って取り込んだものであろうか。'work out' は計画などを「煉る」という意味である。最後の 'was predicated on' の部分は誤訳とは言い切れないが、原文の切迫した感じが十分に出ているとは言えない。'A is predicated on B' というのは、〈A が成立するためには、B の成立が前提である〉という意味である。この意味については、COBUILD 2 の説明が明解である：

predicate 2 If you say that one idea or situation is predicated on another, you mean that the first idea or situation can be true or real only if the second one is true or real; a formal use. *Financial success is usually predicated on having money or being able to*

*obtain it.* [COBUILD 2]

なお、COBUILD 1 の同じ項には、*Airport* のここの箇所が引用されている。

【5 6】 'MISQUOTE' をめぐって。

'Very well! Let us be on our way!' Lawyer Freemantle raised his hands like a jet-age Moses, and misquoted : 'For I have promises to keep, with much ado before I sleep.' (233)

「よし、それでは出掛けるとしましょう」フリーマントルは、ジェット時代のモーゼさながら手を上げて「約束したことは、眠る前にちゃんと守ろう」と聖書の文句を引用して叫んだ。(344)

(改訳)「よし、それでは出発することにしましょう！」フリーマントル弁護士はジェット時代のモーゼよろしく両手を挙げ、詩の一節を間違っ引用して言った。「守るべき約束あればなり、いかなる面倒ありとも眠る前に果たさねばならぬ」

弁護士に挑発された空港付近の住民の一団が空港にデモをしかける場面である。翻訳で 'misquote' を単に「引用する」と取っているのはもちろん誤りであるが、さらに、原文にない「聖書の文句を」を付けたのは二重の誤りになっている。モーゼが出てきたので、聖書からと早合点されたものと見られるが、この引用の元はアメリカの詩人 Robert Frost の *Stopping by Woods on a Snowy Evening* (雪の夕べ森に立ち寄る) であり、原詩は次のようになっている：

The woods are lovely, dark and deep.

But I have promises to keep,

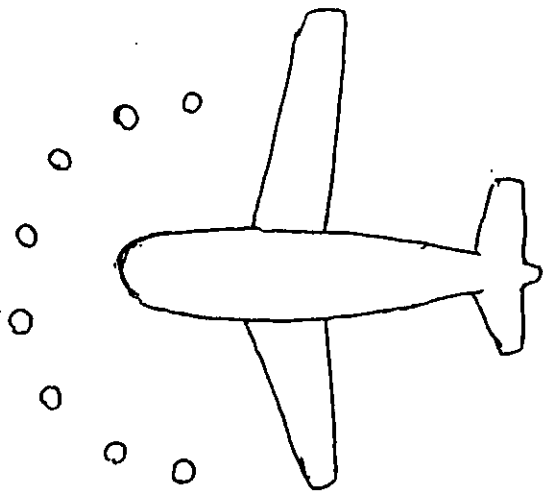
And miles to go before I sleep.

## 【57】 杜撰(ずさん)な読み。

As Patroni surveyed the scene, one of the crewmen switched on portable floodlights which were rigged in a semicircle in front of the aeroplane's nose. (236)

パトローニが現場を調査する時、用員の一人が携帯用の照明灯をつけ、飛行機の頭のところを半円形に照らし出した。(350)

(改訳)パトローニが現場を見回している時、要員の一人が飛行機の鼻先を半円形に囲むように配置した携帯用の照明灯にスイッチを入れた。



パトローニは飛行機がぬかるみにはまっている現場に到着した。その脚の部分がよく見えるように照明灯が地上に半円形に配置してある。翻訳では、'rigged'〈設置された〉が見落とされ、その結果 'in a semicircle' が見当違いの読みをされることになった。照明灯で機首を半円形に照らしだして何をしようというのであろうか。この 'rig' はすぐあとで次のように用いられており、ここでは問題なく訳されている。

(1) 'I'll talk to the captain later. Is the telephone *rigged*?' (238)

「あとで機長と話してみよう。インターフォンはついているかい？」(352)

初めの方の 'surveyed' も〈調査する〉ではなくて、〈目でぐるっと見回す〉

のであり、だからこそ照明灯に点火する必要があったのである。1ページ余りあとに次の文があり、この半円形の照明が地上を照らしていることが明らかになっている。

(2) The shovels were passed around among figures, moving and shadowy outside the *semicircle of* bright lights. (237-8)

半円形の光の外で動く影のような男から男へとシャベルが手渡された。

(351)

(改訳) 半円形に並べられた明るい照明灯の外側で動いているぼんやりした人影にシャベルが次々に手渡された。

ついでながら、'figure' <人影>はこの例のように、人間の姿がはっきり見えない場合に用いられる。COBUILD2 の figure 4 には 'You refer to someone you can see as a figure when you cannot see them clearly' と説明されている。

#### 【58】 慣用句 'THINK BETTER OF' の意味。

'Well,' Gwen said matter-of-factly, 'I was wondering when you'd get around to it.' She snapped her compact closed, and put it away.

'You almost did in the car, didn't you? Then thought better of it.'

'Thought better of what?' (240)

「そう」グエンはもっともらしく言った。「私は、あなたがいつどうやってそれを切り出すかと思ってたわ」彼女はコンパクトを閉じて、それをしまった。「もう大体のことは、車の中で言ったわよね。それからよく考えた？」

「何をよく考えたと言うんだい」 (355-6)

(改訳) 「ところでね」グエンは感情を抑えた口調で言った。「あなたこのことをいつ言い出すのかしらと思ってたの」彼女はコンパクトをぱちん

と閉じてしまいこんだ。「車の中でもうちょっとで言いそうだったわよね。それから思いなおしてやめたのよね」

「何を思いなおしてやめたと言うんだ」

グエンから妊娠したと告げられたデミアレスト機長は、心の中ではぜったい中絶だと思いながら、そのことを言い出せずにいる。その心の中を見透かしているグエンが彼を追及しているところである。まず 'matter-of-factly' が「もっともらしく」と訳されているのが問題である。この日本語は〈(実はそうではないらしいけれども) いかにも理に叶っているかのように [当然のように]〉という意味の語であるが、英語の方はかなりずれていて、〈感情的になっても当然なところに、感情を抑えて冷静に〉という意味である。

COBUILD 2 に次のように説明されている：

matter-of-fact If you describe a person as matter-of-fact, you mean that they show no emotions such as enthusiasm, anger, or surprise, especially in a situation where you would expect them to be emotional.

次に、'almost did [=got around it]' 〈ほとんど言い出しそうと言わなかった〉のであるから、翻訳の「大体のことは言った」は意味が大きくずれる。最後に、'think better of' は普通文字通りの (1) 〈(人を) いっそう高く評価する、見直す〉という意味と、(2) 〈を考え直す、再考して...するのをやめる〉の二つを持っており、ここでは (2) の意味で用いられている。どちらにしても、翻訳のように〈よく考える〉という意味にはならない。この意味を表すのであれば、'think well', 'think over' などと書いてあるはずである。

§ 29 で 'know better than' という慣用句を取り上げたが、'better' をめぐって、英語はかなり特異な現象を示している。



## 【59】 語義の不正確な把握。

'It's really the only sensible thing to do. Maybe in some ways it's unpleasant to think of, but at least it's over quickly, and if it's done properly, therapeutically, there's no danger involved, no fear of complications.' (241)

「これは実際、いちばん意味をなすやり方だ。ある意味では、それについて考えるのは好ましいことではない。しかし、少なくとも早く済むということなんだ。然るべき方法で行なえば、治療上の危険はなく、簡単な問題なんだ」(356)

(改訳)「中絶するのが実際のところ唯一の賢明な方法だよ。ある意味じゃあそういうことを考えるのは不愉快だろうけれども、少なくともそうすれば事は手っ取り早くすむし、適切に処理すれば治療上の危険はないし、余病を併発する心配もないしね」

デミアレスト機長はしきりに中絶するように説得を試みている。ここに見られる誤訳は、語義を解釈する時に、字面に頼って適当に推察するだけで、辞書で確認することを怠った結果生じるような種類のものである。

最初の 'sensible' は語形だけを見ると確かに 'sense' 〈意味〉という形が含まれているが、-ible を付けると別の意味になり、〈良識に基づく〉というような意味になる。COBUILD 2 には、'Sensible actions or decisions are good because they are based on reasons rather than emotions.' とある。翻訳の「意味をなすやり方」という捉え方はこの文脈では、それこそ「意味をなさない」だろう。

次に、'unpleasant' が「好ましいことではない」と訳されているが、これもかなりはずれた捉え方である。'(un)pleasant' は人間の快・不快の感覚を指す語であり、日本語の「好ましい・好ましくない」は快・不快以外の基準に基づく判定を指す語である。

最後に、'no fear of complications' が「簡単な問題なんだ」と訳されてい

るのは、'complication' を〈複雑化〉のような意味に解した結果であろうと推察される。ここでは〈合併症〉の意味である。

【60】 'THE THING IS' / 'CONCEIVE' は〈妊娠する〉。

'The thing is,' Gwen said slowly, as if thinking aloud, 'I've never conceived a child before, and until it happens a woman always wonders if she can. When you find out, as I have, that the answer's yes, in a way it's a gift, a feeling...that only a woman knows... that's great and wonderful. Then, suddenly in our kind of situation, you're faced with ending it all, of squandering what was given.' (242)

グエンはあたかも独言を言うようにゆっくり言った。「今まで、一度も子供のことなんか考えたことなかったわ。でも、女は自分にできるかどうか不安なのよ。それが、今の私のようにできるって言うことを知り、それはさずかりものなんだと思う。その感情...それは女だけにしかわからない感情だけど、とても素晴らしいと思うわ。だけど、それを終わらせようとしている。折角与えられたものを無駄にしようとしている」(358)

(改訳) 「大切なことはね」グエンは独り言を言っているかのようにゆっくり言った。「私が今度初めて妊娠したってことなの。女っていうのは、妊娠するまでは妊娠できるだろうかって不安に思うものなの。私の場合のように、妊娠できるって分かった時、それは授かりものっていう感じなのよね。女にしか分からない気持ちだわ。とっても嬉しくて素晴らしい気持ち。それが、突然私たちのようなことになると、何もかも終わり、与えられたものを無駄に捨てなきゃならなくなるのね」

中絶を要求されて、グエンは心のうちを訴える。ここには、誤訳と訳し落としが見られる。まず冒頭の 'The thing is' が落とされている。これは講義

などでよく用いられる挿入句的な表現で、‘The point is’と同じく、〈重要な点は〉という意味である。最近の英和辞典（研大5, SPD2, NGL）には採録されているが、この翻訳がなされていた当時の辞書にはなかったのかも知れない。

次に、‘conceive’〈妊娠する〉が「考える」と誤訳されている。このために、あとに続く部分が意味が曖昧なことになった。「女は自分にできるかどうか」とあるが、文脈からは「自分に考えることができるかどうか」とも読める。「(子供が)できるか」と読ませるつもりかも知れないが、それならば、はっきりと「子供が」を入れるのが、読者に対して親切というものである。

最後に、‘suddenly...’の部分が落とされている。つまり、男から中絶を迫られるという場面のことである。

#### 【6 1】 挿入句的な ‘I PROMISE YOU’.

‘...and I promise you it’ll be medically safe.’ (243)

「...そして、医学的にも安全だと約束するよ」(359)

(改訳)「それに、ほんとに医学的にも安全なんだよ」

デミアレスト機長はしきりに中絶するように奨めている。ここに用いられた ‘I promise you’ は挿入句的な慣用句で、SPD 2 に次のようにある：

*I promise you* 〔話〕 確かに、ほんとうに： I ~ you, I don’t know.  
ほんとうに知らないんだ。

この用例を「知らないと約束するよ」と訳すと意味をなさないことから分かるように、この ‘promise’ は〈約束する〉という意味ではない。機長も自分が手術をするわけではないから、その安全性を「約束する」ことは出来ない。ここには日英語間の微妙な意味の食い違いが認められる。‘promise’ の方が意味範囲が広いということである。挿入句として、文の他の部分との結

び付きが弱いために、文末に付けられることもある。

(1) You won't lose your money, *I promise (you)*. [CGE2. § 339]

これと同類の表現として、'I (can) tell you' がある。これも文末に用いられることが多く、〈本当ですよ〉という意味である。

(2) "But I'm *not* a serpent, I tell you!" said Alice.—Louis Carroll, *Alice's Adventures in Wonderland*. (あたし、へびなんかじゃないっ  
たら)

## 【6 2】 外来語形の慣用，その他。

The old cars were driven into airport parking lots, then license plates and other obvious identification quietly removed. Engine serial numbers could not be removed, of course, but the time and trouble involved in tracing them was never worth while. (246)

古い車を空港の駐車場に持ち込み、それからライセンス・プレートやはっきりと所有者の判るようなものをいっさい、こっそりはずしてしまうのである。勿論、エンジンの通し番号は、とり外しができないが、それを調べあげるのに要する時間と手間は決して意味をなすものではない。(364-5)

(改訳) 古い車を空港の駐車場に乗り入れ、ナンバー・プレートその他すぐ身元の分かりそうなものはそっと取り外す。エンジンの製造番号はもちろんはずすことはできないが、それをたどって車の持ち主を見付けだすのに要する時間と手間は掛けても到底間尺に合うものではない。

廃車を只で処理する方法のことを言っているところである。'license plate' はアメリカ英語で、イギリス英語では 'number plate' という。外来語として

は、どういういきさつからか、イギリス英語の形の方が慣用になっているので、翻訳でも慣用に従うべきであろう。次に、エンジンの 'serial number' は文字通りには「通し番号」であるが、これも慣用としては「製造番号」という。さらにアメリカの軍隊の場合には「認識番号」であり、図書館関係では、「逐次番号」と呼ばれている；Cf. SRD 2.

最後の 'worth while' は〈手間、時間、お金などをかける価値がある〉という意味の普通の語であるが、これがどうして「意味をなすもの」と取られたのか、不可解である。

### 【63】 'SANDY' は髪の色。

Now he saw a newcomer join the queue — a nervous-looking man — spindly and stoop-shouldered, and with a small, sandy moustache. (249)

また新しく、神経質そうな、肩のいかったちよっぴりざらざらの口ひげを生やした男が、列に入ってくるのを見た。(369)

(改訳) またひとりの男が新しく列に加わるのが見えた。神経質そうで、痩せて弱々しく前かがみで、薄褐色のちよび髭を生やしていた。

ゲレロが空港に到着し、いよいよ生命保険の自動販売機のところに辿り着いたのをデミアレスト機長はたまたま目にする。'stoop-shouldered' というのは〈前屈みになった〉ということで、翻訳の「肩をいからした」というのは、むしろ逆の姿勢である。ここには尾羽打ち枯らした敗残の男の姿がある。次に、'sandy moustache' が「ざらざらの口ひげ」と訳されているが、ここには二重の誤りが含まれている。まず 'moustache' が 'beard' と混同されているらしいということがある。'moustache' はうわ唇の伸ばした髭のことをいうのであるから、「ざらざら」になるはずはない。「ざらざらのひげ」は普通 'a stubble of beard' という。次に、'sandy' 〈砂のような〉というので「ざらざら」が出てきたのだと思われるが、髪の色に用いられる時は色

を指す。これは COBUILD 2 によれば, 'light orange-brown' を指す。

(未完)

### 参 考 文 献

- 国広哲弥(1974), 「人間中心と状況中心」, 『英語青年』2月号, 研究社。  
 ———(1993), 「認知意味論」, 『神奈川大学評論』第14号, 神奈川大学。  
 Langacker, Ronald (1990), *Concept, Image, and Symbol*. Mouton de Gruyter.

### 使用辞書類 略号解

- CGE2 = Geoffrey Leech and Jan Svartvik, *A Communicative Grammar of English*. 2nd edition, Longman, 1994.  
 CIED = *Cambridge International Dictionary of English*. Cambridge University Press, 1995.  
 COBUILD1 = *Collins Cobuild English Language Dictionary*. Collins, 1987.  
 COBUILD2 = *Collins Cobuild English Language Dictionary*. New Edition, Collins, 1995.  
 COD8 = *Concise Oxford Dictionary of Current English*. 8th Edition, Clarendon Press, 1990.  
 大辞林 = 『大辞林』三省堂, 1988.  
 英和活用2 = 『新編英和活用大辞典』, 研究社, 1995.  
 研大5 = 『研究社英和大辞典』第5版, 研究社, 1980.  
 MWCD = *Merriam Webster's Collegiate Dictionary*. 10th Edition, 1993.  
 NGL = 『新グローバル英和辞典』, 三省堂, 1993.  
 POD8 = *The Pocket Oxford Dictionary of Current English*. 8th Edition, 1992.  
 三国 = 『三省堂国語辞典 第四版』, 三省堂, 1992.  
 新クラウン5 = 『新クラウン英和辞典』第5版, 三省堂, 1995.  
 SPD2 = 『小学館プログレッシブ英和中辞典』第2版, 小学館, 1987.  
 SRD2 = 『小学館ランダムハウス英和大辞典』第2版, 小学館, 1994.